赤レンガ 形変え敷石に

八代市日奈久 地震被災 解体倉庫の跡地

熊本地震で被災し解体された八代市日奈久中町の「赤レンガ倉庫」の跡地に12日、倉庫のれんがを再利用した広場が完成した。日奈久の新たな観光資源として、イベントなどで活用する。

再利用したれんがの敷石の周りに、砂利入れなどの作業をする地元住民ら＝八代市

広場完成「イベントで使って」

倉庫は1921年に造られ、氷室やエビなどの乾燥場として使われていた。地震で壁の一部が崩れ、ひび割れも発生した。

広場は約60平方㍍。地元住民や熊本高専八代キャンパスの学生らなどでつくる「日奈久赤レンガ倉庫跡地を活かす会」が、約10カ月かけて整備した。

倉庫の屋根部分のれんがを広場中央に敷き詰め、壁の一部を高さ約35㌢に積み直し、ベンチにした。かつての倉庫を写真などで説明する看板も立てた。

作業最終日の12日は、雪が舞う中、地元住民ら約15人が敷石の周りなどに砂利を入れ、窓枠に使われていた台形の「要石」でモニュメントを造った。

作業に参加した熊本高専八代キャンパスの森本学教授は「隣の織屋と共に日奈久の観光客に訪れてほしい。地元にもイベント会場として、ぜひ使ってほしい」と話した。

3月3日にお披露目式を開く。（中村悠）